

統計数理研究所創立 75 周年にあたって

所長 椿 広計[†]

統計数理研究所は、令和元年 2019 年 6 月 5 日に設立 75 周年を迎え、その記念事業を 2019 年度に展開し、「統計数理」誌でも所員ならびに関係者の寄稿による記念号を発刊することとなった。「統計数理」誌もその前身である講究録から数えると発刊 75 周年ということになる。「統計数理」誌が創立記念号を編集するのは、第 42 巻第 1 号の創立 50 周年記念号から数えて 25 年ぶりである。

75 年前の設立を簡単に振り返ると、1943 年 11 月に学術研究会議の「統計数学を中心とする統計科学に関する研究所の設立」の建議が、同会議会員の掛谷宗一東京帝国大学理学部教授からなされた。この建議に基づき、1944 年 6 月 3 日勅令 385 号「統計数理研究所官制」が公布され、同年 6 月 5 日(月)官報 5215 号に掲載された。官制第一条にその設置目的が記されており「統計数理研究所ハ文部大臣ノ管理ニ属シ確率ニ関スル数理及其ノ應用ノ研究ヲ掌リ竝ニ其ノ研究ノ連絡、統一及促進図ル」となっている。同盟時事月報第 8 巻第 6 号(通号 217 号)1944 年 6 月 4 日記事には、「決戦下軍事上、生産或いは国防計画の樹立等の面において統計処理の重要性増大に鑑み、文部省では統計数理研究所を創設することとなり、五日官制を交付、初代研究所長に東京帝大理学部教授専任の所員 6 人、助手 6 人、書記 2 人とされ、東京都下谷区上野公園帝国學士院内に置かれた。」と報じられている。実際の発足時所員は、専任所員としての河田龍夫、坂本平八、松下嘉米男、兼任所員として掛谷宗一(所長、東京帝国大学理学部長)、北川敏男(九州帝国大学教授)、伊藤清(名古屋帝国大学助教授)、増山元三郎(気象台技師)、角谷静夫(大阪大学助教授)、秋月康夫(第三高等学校教授)、佐藤良一郎(東京高等師範学校教授)であった。戦後日本の数学、統計学をけん引した研究者である。

統計数理研究所の歴史を振り返ると、第 2 次世界大戦という非常時における発足期、昭和 20 年代戦後占領政策による社会の計量化を目指した統計調査重視の転換期、高度成長時代の産学連携統計研究の推進期、そして文部省直轄研究所から大学共同利用機関へ、これが創立 50 年までに起きたことである。なお、統計数理研究所及び「統計数理」誌 50 周年の歩みについては、第 42 巻第 1 号の清水良一所長(当時)の巻頭言を参照するのがよからう。

一方、直近 25 年間の統計数理研究所の大きな動きとしては、以下の 4 つを挙げることができよう。第一は、2004 年創立 60 周年に大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 統計数理研究所となるとともに、国立大学法人総合研究大学院大学複合科学研究科統計科学専攻が設置され、統計科学専攻を支える基盤研究機関となったことである。その後、統計科学専攻での学位取得者は、現在日本の数理・データサイエンス教育研究のリーダーとなっている者も多い。2019 年 11 月現在学位取得者は 141 名に達している。

第二は、創立 60 周年前後から、統計数理の基礎研究を支える基幹研究系活動に、統計数理の活用を支える戦略研究センター、後の NOE(Network of Excellence)活動につながる研究センター活動が開始されたことである。これを通じて、統計数理によってその活動が発展しうる産官学の様々なコミュニティに対して統計数理研究所が繋がるということが可能になった。

第三は、2009 年に、広尾から立川市への移転が完了し、研究設備環境が充実したことであ

[†] 統計数理研究所：〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3

る。創立 75 周年は、立川移転 10 周年でもある。

第四は、2011 年 4 月に統計思考院を設置し、統計思考力育成事業を開始したことである。これらを通じて、多様な学術支援に必要な、データ基盤、知識基盤、人材基盤という三位一体の基盤構築事業が、情報・システム研究機構の中で推進可能になったのである。

現在、データ中心科学、データサイエンスの活用力が、学術のみならず産業競争力の源泉となるデータ駆動型社会の到来を迎えている。国際的にもこの 20 年間、データサイエンス分野への優秀な人材の投下が加速しており、日本が必ずしも競争優位な状況にはなっていない。一方、次世代競争力の源泉となる人工知能やロボティクスなどの基幹部分を支え、進化させる基礎研究としての統計的学習・推論や統計的モデリング研究の役割は、極めて本質的なものとなった。また、この種の基礎研究を学術・社会に分かりやすくかつ速やかに展開し、議論し、良い方法を共有する場の必要性も日々増している。

日本の統計数理中核研究組織としての統計数理研究所と、そのコミュニケーション機能を担う「統計数理」誌は、これら社会ニーズに応え、統計数理研究所を支え、統計数理研究所が支える多くのコミュニティとともに、実りあふれる 100 周年に向けた歩みを着実に進めなければならない。